

第35回社会思想史学会 セッション B ハンナ・アーレントの思想の再検討

世話人： 対馬 美千子(筑波大学)

報告者： 阿部 里加(一橋大学社会学研究科博士課程)、対馬美千子

討論者： 小山 花子(信州大学)

本セッションでは、これまでアーレント研究の前面にでてくることのなかったアーレント思想の側面から、彼女の思想の再検討を行った。阿部は「私的領域」概念に、対馬はアーレントと文学の関係に焦点をあて報告を行った。最後に、小山が阿部報告、対馬報告への応答を行った。

報告・討論内容

阿部(報告):「アーレントにおける私的領域・内奥・苦悩」

本セッションでの発表内容は第29回大会で報告済みのテーマ『アーレントにおける私的領域と労働概念について』の延長上にある。報告では、従来のアーレント研究において真正面から論じられることのなかった「私的なもの」をめぐる概念のうち、私的領域の善、内奥の心、苦悩にかんする叙述の重要性を呈示した。

はじめに、アーレントにおけるルソー引用の意義を内奥にある心と苦悩(suffering)の能力に言及し検討した。目に見えない心や苦悩といったものは、積極的な世界変革や世界建設の行為(action)とは別の、社会の内側ないし私的なものの文脈において位置づけられているがそれらはたんに消極的側面においてのみ述べられているのではない。というのも、私的領域にある善の叙述にしたがえば、「私的」であるとは、すなわち、この世界の中に存在しつつ、この世界や公的空間を「積極的に否定する」ありようを指すからである。初期の『アウグスティヌスの愛の概念』から晩年の「意志」論まで貫かれているこうした積極的な「否定性」は、アーレントが他者ではなくむしろ自己に立脚して論じる場面で浮き彫りとなっている(「孤独」についての研究報告は時間の制限上、割愛した)。

対馬(報告):「アーレントと文学の力」

アーレントが文学のうちに見出す力について、世界の永続性、構想力／想像力、<もはやない>と<まだない>の間の潜在的次元、受容の力、世界における避難所という観点から考察した(以下、簡単にその考察の内容をまとめる)。まず、アーレントが文学のうちに見出す力とは、人と人との間の空間で生じる活動と言論、すなわち最もはかないものである政治的なものに永続性を与えることにより、「活動と言論にふさわしい場所」としての世界を創造し、そのような世界の永続性を支える力であると理解することができる。また、アーレントは、文学の力を、単なる空想や想像ではなく、世界や出来事の「意味」を理解するための明晰な洞察力ととらえている。それは彼女が「理解」の

概念との関係でとらえる構想力／想像力の側面、すなわち、世界からふさわしい距離を保つことにより、世界の現実を理解する洞察力である。さらに、アーレントが文学のうちに見出す力は過去と未来の間、〈もはやない〉と〈まだない〉の間の潜在的次元に関わっている。文学が〈もはやない〉と〈まだない〉の間の潜在的次元において、新たな仕方で世界に接近する力をもつことをアーレントは示唆している。最後に、アーレントの示す物語と詩の政治的機能について検討したが、アーレントにとって、物語は、私たちが世界を受容すること、そして現実と和解することを可能にする力をもっている。それは人間の受容する能力に関わっており、私たちが現実との和解、世界との和解へと導き、世界に帰還させるという意味で政治的機能をもつ。詩は、人間が行為するのを妨げるすべての情緒を除き去るカタルシスの作用をもち、世界で遭遇する出来事に声もなく呪縛されている状態から私たちを救い出す力であり、「世界における避難所」を私たちにもたらししてくれる。

このように本報告では、文学が、世界の永続性、世界の理解、世界への帰還、世界との和解、世界における避難所等に関わることをみた。そして、アーレントの文学観の背後にあるのは、文学的想像力が、世界の現実からある距離を保ちながら、まったく新しい仕方で世界の現実へと接近する可能性として存在するということだということを示唆した。

小山(討論):『赦し』とアーレント

阿部・対馬両氏の報告を受け、『赦し』とアーレント』という題で討論を行った。ハンナ・アーレントは、『人間の条件』(1958年)の興味深いパッセージの中で、以下のように主張している。自由に活動するという人間の能力は、実際のところある窮地または困難をもたらすことになる。それは、自由な活動が、予め知り得なかった様々な「結果」を世界に生じさせ、活動者自身がこうした「結果」の犠牲者になるということである。赦しという能力は、行為者と被害者とをこうした諸結果から解放するという。赦しによって、犯された罪は取り消され、自由が復元される。人間の行為の問題に対処する能力として赦しに着目するアーレントのこの議論は、1990年代以降、特に注目を集めている。かつて政治学の理論としては「風変わり」と評されたこともあるアーレントの赦し論であるが、和解あるいは移行期の正義の問題との関連において、ジャック・デリダの赦し論などとともに近年注目を集めているのである。本報告では、こうした背景を受けて、アーレントの赦し論についての考察を試みた。まず、『人間の条件』に登場するアーレントの赦しについての議論を整理し、さらにアイヒマンについての考察において、赦しがどのような役割を担っているかについて検討した。最後に、理解というアーレントの概念に目を向け、和解と移行期の正義という問題にアーレントの赦し論でアプローチする試みの可能性と限界を探った。

発表についてのフロアとの質疑応答

阿部の報告について:内容に関し、「アーレントが語られないものを捨象したという周知の批判についてどのように考えているか」という質問があり、これに対して報告者は次のように応えた。物語ることはたしかにアーレント思想のメルクマールとされている。しかし、そもそも、アーレントは言論行為(action)を完璧なものとしては捉えていない。注目されるべきはむしろ、言論や行為から抜け落ちる人格(Person)や正体(who)があると叙述されている点である。というのも、彼女の定義によれば行為において、人は自分が何者であるかを他者に知らせることはできても自分では知ることができないからである。この「行為における自己の不在(触知不可能性)という穴」のパラドクスについてアーレントはアウグスティヌスの「自分にとって自分が問題となる(quaestio mihi factus sum)」という言葉を通して終生考察し続けている。「行為の穴」を埋めるに値する概念が語られざる暗闇や私的領域において述べられているのもそのためである。そうした私的なものをめぐる叙述、および、行為概念の不完全性、これら二つが看過されているという点でアーレントへの周知の批判は必ずしも妥当しないと考えている。

対馬の報告について:内容に関して、アーレントの文学観は時期によって変化があったのではないかという質問がでた。これに対して、報告者は次のような内容の応答を行った。アーレントは文学のうちに様々な側面を見出しているが、彼女が文学のどのような側面を強調したかということは時期によって異なる。例えば、一九四四年に書かれた「フランツ・カフカ再評価」では、「世界の建設者」、「設計図」という言葉に重きが置かれ、文学が世界の再構築に関わることが示されるが、一九六八年に書かれたディネセン論では、受容、忍耐、想像力による反復という考えを通して、文学と世界の受容との結びつきが強調される。このような時期による強調点の相違がある一方で、彼女の文学についての見方すべてに一貫している点は、それらが世界(世界に対する気遣い)、あるいは世界と人間の関係という視点から文学について考察していることである。

小山の討論について:フロアから、「悪」ではなく「善」についてアーレントの考えはどうなっているか、また、「赦し」と「処罰」を同一線上にとらえるアーレントの理解に問題はなのいかという質問が寄せられ、これらについて討論者の見解を述べた。

参加者数

約40名